
文法の中の話者

白井 智美

言語表現は、くりかえし用いることができる。だが、それは、金づちが何度も使用できるのとは異なる。飯田隆 (2002) ¹⁾

1. はじめに

日独語の移動表現について、認知意味論の分析を示すことによって、「文法構造が意味を持つ」というこの理論に特徴的な文法観の対照言語研究における有効性を検証する。対話において「話者が対話相手のところに移動する」という運動を表すために、ドイツ語では *kommen* が、日本語ではイクのように異なる動詞が使用される現象をとりあげる。

(1) *Ich komme gleich.*

(2) 今行くよ。

本稿で検討されるのは次の2点である。I) 日独の間にみられる文法構造上の相違は、意味的な差異を反映する(=動機づけられている)とみなしうるか。II) 「文法構造が意味を持つ」という主張に正当性はあるか。以下、2章では言語記号が表す「意味」が、これまでどのように捉えられてきたかを本稿の議論に関係する範囲で整理し、「文法構造が意味を持つ」というテーゼの言語理論史における位置づけを確認する。続く3章では、例文(1)、(2)の間にみられる文法構造上の相違が「言語表現の中に現れる主観性の度合いの違い」を反映するものであることを示すことによって、文法構造の意味として「主観性」という視点を対照言語研究に取り入れることの有効性を確認する。

同じ用語で様々な現象が扱われる研究史的コンテキストに鑑みて、次の2つの

1) 飯田隆 (2002)。

用語について最低限の共通理解を作っておきたい。一つ目に本稿で「(1)、(2)の間にみられる一見恣意的な文法構造上の相違は、言語表現に現れる話す主体の主観性の度合いの差を反映する」と主張する時の「主観性」は Langacker (1985, 1990) における「主観性 (Subjectivity)」である。この意味の「主観性」が異なる程度に言語表現に現れる様は次の例文がわかりやすい。

(3) Vanessa is sitting across the table from me.

(4) Vanessa is sitting across the table. Langacker (1990: 17, 20)

(3) では、話者が自らを表現対象の一部として (=me) 客観的にとらえている。ここで話者は、いわば「表現する自己」と「表現される自己」に分裂し、前者が後者を眺めるという構図が成立している。一方、(4) において話者は、「表現する自己」としての役割のみを担っており、言語化される事態の中には現れない。つまり「主観性」とは、「表現する自己」と「表現される自己」の対立において、話者が「表現する自己」としての役割を果たす程度のことである。二つ目に「文法」という用語については、次のような一般的な理解を共有しておきたい。個別言語の知識は、単語、連語、熟語など語彙項目のリストと、この語彙項目の組み合わせのパターンの集合から構成されている。このうち、語彙項目の組み合わせ方のパターンの集合を文法と呼ぶ。すなわち、本稿で「文法構造が意味を持つ」と言う時、この「語彙項目の組み合わせのパターンとしての「文法構造」が、語彙項目が特定の意味を持つと同様に、特定の意味を持つと主張していることになる。以上を踏まえ、次に、「文法構造が意味を持つ」というテーゼの出現経緯を確認するために、これまで言語理論史において「言語表現の意味」がどのように捉えられてきたかを概観する。

2. 理論的背景

「文法構造が意味を持つ」という主張は、言語理論史の文脈を念頭に置かないならば、当然の主張に聞こえるだろう。しかし私たちの文脈では、この主張は、その意味の内実を何とみなすにせよ、その受け入れに準備を要するものである。文法と相補的に言語知識を構成する「語彙項目」に関して、これが特定の音声や

文字、手指動作（以下、形式）と特定の意味の組み合わせ（Form-Meaning-Pairing）を持つこと、つまり「語彙項目が意味を持つこと」については、理論を問わずほとんど異論の余地がない。一方、文法構造に関しては、その形式の単位が何なのか、（文法カテゴリー（名詞、動詞など）なのか、文法関係（主語、目的語など）なのか、それとも構文なのか、それにそれらが担う意味は何なのか、それどころかそもそも、文法構造に関して「特定の形式が特定の意味を担う（= Form-Meaning-Pairing が成立している）」とみなしてよいのか—例えば「主語」を特定の意味に基盤を持つカテゴリーとみなしてよいのか、それではその「意味」は何なのか—ということに関しては理論間でも理論内でも、共通理解がないことが多い。それゆえに、それぞれの言語理論がさまざまな仮説を立てる余地が生まれ、理論間（や理論内）の対立点になっている。「文法構造が意味を持つ」というテーゼは、現代では、いわゆる「認知言語学」に特徴的な文法観とみなされている。この主張が私たちに注意と準備を要請するのは、1950年代以降の言語学には、それを修正するにせよ、発展させるにせよ、踏まえるべき文脈の一つに生成文法があり、その生成文法では、「文法構造はそれ自体としては意味的基盤を持たない、純粋に形式的な原理から構成される」と仮定されているからである。²⁾ この仮説は統語論の自律性の仮説と呼ばれる。この仮説を支持するということは、言語の知識は他の認知諸領域から自立したモジュールを構成すると想定するということである。それはつまり、言語記号が表す意味を研究する際に、少なくとも便宜上、言語領域に特有でない人間の認知能力や知識（認知言語学で百科事典知識と呼ばれるものや、いわゆるコンテクスト）を言語知識（knowledge of language）として考慮しないということだ。この方法論的決定が、以下に詳しく見るが、1950年代以降からある時期までの意味論を「文の統語構造と意味構造の関係」の研究に集中させた。実際に、これら（言語領域に特有でない認知能力や知識やコンテクスト）は『Aspects of the Theory of Syntax』（Chomsky 1965）以降で言うところの「言

2) この仮説の根拠としては、“Colorlessgreen ideas sleep furiously” (Chomsky 1957: 15) という有名な文を思い出していただきたい。この文が文法的には適格（grammatical）であるが意味をなさない（nonsensical）ことから、ある文が文法の規則に従っていることとその文が理解可能な意味を持つことは別の問題である、つまり文法は意味から自律している、と結論づけられた。この仮説はもはや単なる作業仮説ではないという主張があるだろうことも予想されるが便宜上、ここでは「仮説」として話を先に進めることにする。

語能力 (linguistic competence)」に対する「言語運用 (linguistic performance)」の領域におかれ、意味研究の表舞台からは一旦姿を消すことになった。例えば、いわゆるコンテキストを言語運用の問題とみなすということは、コンテキストを「言語知識をどのように使用するか」に関わる知識—語用論の問題—とみなすということである。本稿でこれから見ていくのは、この意味で、1950年代以降「語用論的問題」であり「自律性の仮説を支持する傍証」であるとみなされていた問題を、「文法構造の意味」の問題とみなすことを可能にする文法観はどのようなものでありうるかということについてである。次のような問いから考察を始めたいと思う。「その言語理論では、何が「言語表現の意味」とみなされているか」。本稿には現時点では、特定の文法観や言語理論を否定する意図も、また特段肩入れする意図もない。この問いにそれぞれの理論がどのように答えるのか、それを確認したいだけである。次のセクションでは、この問いに対する認知意味論、生成文法それぞれの回答を確認する。

2.1. 認知意味論における「意味」

1980年代に入ると、言語記号が表す意味を人間の認知的側面と結びつけ、意味に認知的基盤を与えようとする意味論が出てきた。現代では認知意味論 (cognitive semantics) と呼ばれている。認知意味論では、最初期からカテゴリー化 (categorization) の重要性が強調されてきた。この理論では、固有名詞を除く名詞や動詞などの語彙項目は、モノや行為などのカテゴリーにつけられた名前であり、言語行為におけるその都度の語彙項目の使用は、いわばその都度のカテゴリー化の実践とみなされる。つまり、私たちが眼前の動物の個体を「カモ」ではなく「ウサギ」と呼ぶとき (= 語彙項目の適用)、そこで起こっているのは、認識する主体としての私たちが、その個体を、自分がすでに知っている何か (= ウサギ) とみなす (als ob etwas ansehen = Kategorisierung) という Zusammenfassung と Ausfilterung からなる判断のプロセスだと考えられているのだ。「言語記号が何かを意味するプロセス」を「カテゴリー化のプロセス」と見るというのは、このような判断のプロセスを「言語記号が何かを意味するプロセス」とみなすということだ。このプロセスで重要なのは、「何かを何かとみなす」という判断は、今カテゴリー化しようとしている眼前の動物の、例えば意味素性に分解できるような、

—それがあるとして—客観的な特徴といった事物それ自体の性質によって完全に決定するものではないということだ。そうではなくて、そのプロセスの本質は、カテゴリー化する主体による仮説形成—メタファー³⁾を通じたカテゴリー化—つまり、認知主体がその時その場で、それを何とみなすか (als ob etwas ansehen) にかかっているという点にある。⁴⁾ 認知意味論的な文法観の最大の特徴の一つは、このカテゴリー化が「言語記号が何かを意味するプロセス」のさまざまなレベルで起こっていると考えるところにある。このようなカテゴリー観が、その後の分析に決定的な影響を与える転軸点となる。カテゴリー化には、メタファーする(仮説形成する)人間が、そしてメタファーにはメタファーする主体の認知機構や百科事典的知識、常識などが否応なく関係するからだ。

2.1.1. カテゴリー化する人間

言語記号が何かを意味する過程において、人間が「カテゴリー化する人間」としての役割を果たすとは具体的にどういうことか。例えば廣瀬(2007)は次のように述べている。「言語が語る意味の世界は客観的な世界そのものではなく、われわれ人間の目を通じた世界です。従って、言語の意味を考えるときには、人間がものごとをどのように捉え、理解し、判断するかという視点が不可欠となります」。また山梨(2000:11)は「認知言語学のアプローチでは、日常言語の表現は[……]主体が外部世界を解釈していく認知プロセスの反映として規定される」としている。ここに見られるのは、「現実構成主義 (constructivism) 大堀 (2002:2)」という考えだ。それはつまり、ありのままの世界を、人間が様々な捉え方 (construal) のもとに再構成するという考え方である。廣瀬 (2007) はこの現実構成主義を支える証拠の一つとして「人間の空間認知における非対称性」という現象を挙げている：

-
- 3) 認知意味論における意味概念を理解するもう一つのキーワードとしてのメタファーについては Lakoff (1987) や Lakoff/Johnson (1980) を参照されたい。
- 4) ここで詳しく触れることをしないが、意味する過程をこのようなカテゴリー化のプロセスと捉えることから付随的に要請されるのが、語彙項目は、生成文法がそうするように、必要十分条件によって定義されるのではなく、典型的な事例によって代表される、例外やファジー性を許容するものだという認識である。ただし、生成文法ではあくまでも統語構造にかかわる範囲で意味素性を扱っており、そもそも必要十分条件とはしていない点には注意が必要である。

例えば具体的な状況を思い描かない場合、われわれは任意の二つの個体 A、B に関して、「A が B の上にあれば、B は A の下にある」[...] という推論が論理的に妥当であると考えます。ところが実際の言語使用では、このような推論は成り立ちません。日英語ともに、「辞書は机の上にある」(The dictionary is on the desk.)[...] は自然な表現ですが、「机は辞書の下にある」(The desk is under the dictionary.) は非常に不自然な表現になります。これは、人間の空間認知における非対称性という性質から説明されるものです。つまり、われわれの空間表現では、より動きやすいと捉えられるものを、より動きにくいと捉えられるものとの関係で位置づけるのであって、その逆ではないということです。(廣瀬 2007)

このような観察から、言語記号によって表される意味は、客観的な世界そのものではなく、人間というフィルターを通した主観的な世界だ、という現実構成主義的な認識が生まれる。⁵⁾ そもそも何かがあるの「上にある」、あるいは「下にある」といった命題は、人間の認知活動（捉え方）と独立に客観的に成り立つわけではない、というのが認知言語学が強調する点だ。このことを踏まえると、現実構成主義的に「言語記号が何かを意味するプロセス」を見る、というのは、先に見た通り、言語記号が何かを意味するプロセスを、「認知主体がその時その場で、その事態を何（「A は B の上にある」とか「机は辞書の下にある」とみなす (als ob etwas ansehen) か」というカテゴリー化のプロセスと見るということだ。このような考察が正しいとすると、認知意味論においては、言語記号によって表される意味は、客観的な世界そのものではなく、カテゴリー化する人間の認知機能（フィルター）を通して初めて成立する主観的な世界だということになる（意味＝主観的な世界）。言語記号によって表される意味を成立させること、それが言語記号が何かを意味する過程において「カテゴリー化する人間」が果たす役割なのだ。とりわけ注目したいのは、このモデルにおいては、二つの異なる「意味」が問題になっている点だ。すなわち、語と語の関係の中で定義される「意味」（＝客観的な世界）と、語と指示物の関係によって定義される意味（＝「辞書は机の上に

5) 廣瀬 (2007) は、「A は B の上にある」から「B は A の下にある」という推論が成り立つ世界を客観的世界と呼び、「辞書は机の上にある」から「机は辞書の下にある」という推論が成り立たない世界を人間が捉える内的世界と呼んだ。このあたりの議論については酒井 (2013) を参照されたい。

ある」など主観的な世界) である。これはいわゆる Sinn と Bedeutung の差だ。この差はフレーゲ (Gottlob Frege) によって『Über Sinn und Bedeutung』(1892:40-65) の中で論じられた。フレーゲは、異なる二つの記号 (a と b) の「等しさと差異」の本質を明らかにするために、意義 (Sinn) と意味 (Bedeutung) という二つの概念を区別した。⁶⁾ 記号にこの二つの意味の側面を認めるということは、例えば、「二つの記号が等しい」という時、それは「意義に関する等しさ」なのか「意味に関する等しさ」なのかを区別する必要があるということだ。「明けの明星は太陽に照らされた物体である (Der Morgenstern ist ein von der Sonne beleuchteter Körper.)」(Frege 1892)。この文の中の「明けの明星」を「宵の明星」に置き換えると変化する何か、それが意義 (Sinn) であり、変化しないものが意味 (Bedeutung) だ。語について言うならば、明けの明星と宵の明星は「金星」という同じ意味を持つ、しかしこの意味 (=金星) は、「明けの明星」「宵の明星」というように、与えられる様式 (Art des Gegebenseins des Bezeichneten = 意義 (Sinn)) が異なる。文⁷⁾についても平行したことが言える。文にとっての意味 (=変化しないもの) は真理値 (Wahrheitswert) であり、意義 (=変化するもの) はフレーゲでは思想 (Gedanke) だ。ここで重要なのは、言語記号の意味に関して意義と意味を分離せず、例えば「文の意味⁸⁾は真理値だ」という仮定で意味研究を行うと、異なる様式で与えられた、同じ意味 (=真理値) をもつすべての文が、同じ意味を有することになるという点だ。このことの言語分析における具体的な帰結は、同一言語内でも異なる言語間でも、与えられ方 (形式、様式) が異なる文に関して、それぞれが別の意義 (思想) を持つとみなすことができないということだ。それが徹底して実践されているかどうかの判断は現段階では置いておくとしても、認知意味論においては、言語記号が何かを意味する過程に「カテゴリー化する人間」というファクターを導入することで、理論上この二つの意味を分けることが可能である。また、認知意味論が台頭した経緯を見る限り、この二つの意味を分離するためにこのファクターを導入したと見ることもできるのではないかと思う。この

6) 現在一般的に言語学で使用されている用語法と異なるので注意されたい。Frege の Sinn は Intension (内包) または Bedeutung (意味) に、Frege の Bedeutung は Extension (外延) または Referent (指示対象) に対応する。

7) ここでは主張文 (Behauptungssatz) を単に文と呼ぶ。

8) 以下、Sinn と Bedeutung を区別しない場合の「意味」を斜体にする。

あたりの事情は、「言語記号が何かを意味するプロセス」を考えるにあたり、人間と言語と世界の関係を現実構成主義的に見ない言語理論と比較するとよく分かる。

2.2. 生成文法における「意味」

デカルト (René Descartes) やカント (Immanuel Kant) の合理主義哲学の認識論から出発する言語理論においては、言語記号が何かを意味するプロセスにおける人間と言語と世界の作用方向は現実構成主義のそれとは異なる。⁹⁾ デカルトは、われわれ人間は生まれながらに世界を認識するための理性 (Vernunft) を備えていると考えていたし、カントは私たちは直接時間や空間を認識するためのフォーマット (Formate) を備えていると考えていた。こういった超経験的な装置 (Apparat)¹⁰⁾ を意味論に持ち込むと、意味と言語の関係を、「その装置によってすでに獲得されそこにある世界」と「これに対峙し (それを読み取り表現) する人間」という二元論で捉えることが可能になる。つまり、言語記号の意味が世界と対応することになる (意味=世界)。言語記号の意味をこのように、「超経験的な装置によってすでに獲得されそこにある世界」と「これに対峙し (それを読み取り表現) する人間」という二元論で捉えると、理論上も方法論上も、言語記号の意義 (Sinn) (= 認知主体がその事物や事態を何とみなすか (als ob etwas ansehen) というカテゴリー化のプロセスを経て成立する言語記号の意味) に関しては思案の外、ということになる。¹¹⁾ それだけではない。言語記号の意味はすで

9) 確かに一見経験主義的に見える認知言語学においても、基本レベルのカテゴリーを習得する能力が経験以前に人間に与えられていると前提する点では合理主義を保持していると言わざるを得ないだろう。合理主義を保持しているという点は、言語を獲得する人間を白板と考える理論との決定的な差だ。しかし、完全な経験主義的意味観と、部分的な経験主義的意味観を持つ認知言語学の関係についてはここでは触れることができない。

10) 言語習得装置 (language acquisition device) の一部としての生得観念 (innate idea) についても併せて考える必要があるがここでは触れることができない。

11) 認知言語学における「話す主体の役割」に言及する際にも、原理的に同じ二元論が想定されていて、生成文法における話す主体の役割との差は、意味を読み取る行為がどの程度まで主体的な行為と見なされるかということにあるだけなのではないか、と思われるかもしれない。しかしここで認知言語学における「話す主体」の役割として注目しているのは、話す主体が、(Ausdrucksmittelではなく)「Erkenntnismittelとしての言語」を使用する主体としての役割も担っているという点である。このような主体の措定には、「読み取られ表現されるものとしての世界 (意味) が発話以前にはない」という仮定を必要とする。この点については今後さらに検討する必要がある。

にそこにあつて、言語はこれを表現するための道具 (Ausdrucksmittel) とみなされるわけであるから、当然ここには人間がカテゴリー化を通して獲得する意義や、あるいは、思考や認識、記憶を可能にする装置としての言語の機能といったことについても考察する余地がなくなる。また、先に見た通り、同じ事態を描写するとみなされる複数の文 (=異なる様式で与えられた同じ意味 (=真理値) をもつ複数の文) —例えば (5) と (6) のような能動文と受動文—の間に対立してあるものを「意味」と見ることができなくなる。そこにあるのは同じ意味なのだから。

(5) Der Löwe frisst mich.

(6) Ich werde vom Löwen gefressen.

このように見てくると、デカルト的な公理から、統語論の自律性の仮説が生まれる論理展開が上手く追えるのではないかと思う。すなわち、意味的な基盤に求めることができない二つの文の差異を生む要因が、いわば正当に、統語構造の中に求められたのだ。こうしてこのような公理を持つ言語理論において意味論は統語論 (syntax) になる。言語記号の意味が、理論上、世界と対応する (= Sinn と Bedeutung の分離がない) のは、「文の意味を知っている」とは「世界がどういう状況の時にその文が真になるかを知っていること」だといっても同じことだ。"Snow is white" is true if and only if snow is white. (「雪が白い」は雪が白い時に、そしてその時にのみ真である。) というタルスキー (Alfred Tarski) の文が、真理条件的意味論の枠組みで、統語論ではない意味研究を行うことを可能にした文だとみなされることがある。¹²⁾ しかしここまで見てきたことを踏まえると、それはタルスキーが、理性やフォーマットに代わる超経験的な装置として、対象言語の真を定義する超言語 (metalanguage) を提案したからだとみなしてよいだろう。実際、このような同語反復によって得られる言語記号の意味は、超経験的な装置によって得られる意味と同じく、意味と言語の関係を、「超経験的な装置によってすでに獲得されそこにある客観世界」と「これに対峙し (それを読み取り表現) する人間」という二元論で捉えて得られる意味に等しい。客観世界 (= 雪が白いこと) を知るためには言語の意味を知らなければならないが、そのためには (言語の意

12) 以下の議論については宗宮 (1996) を参考にした。

味の真を定義する) 超言語を理解しなければならない。しかし超言語を理解するためにはあらかじめ客観世界を知っていなければならないという循環論からは、この二元論を取る限り抜け出せない。例えば、英語の人称代名詞 I について Kaplan (Kaplan 1989:520) が述べていることをドイツ語 *ich* にも当てはめてよいとすると、*ich* は、「任意の発話文脈において *ich* はこの発話文脈における *ich* のトークンの発話者を指す。」¹³⁾ と定義することができる。同様に *wir* は、「*wir* の発話トークンにおいてその *wir* のトークンの発話者であるものを含む集合であり、この集合は複数の有生物から成る (Nunberg 1993:8-9)」となる。Ich の意味を「*ich* の発話トークンにおいて、*ich* のトークンの発話者であるもの」、*wir* の意味を「*wir* の発話トークンにおいてその *wir* のトークンの発話者であるものを含む集合」とするのは、言語記号の意味を現実との対応に求めることに等しい。一方、「あなたと私」をまとめて *wir* と表現することに存在論的なステータスはなく、そこにあるのは認知主体による「あなたと私」を *wir* としてみる (= *als ob etwas ansehen*) というカテゴリー化のプロセスだと考えるのが認知意味論的な指標詞¹⁴⁾ の意味だ。言語記号が何かを意味する過程を考えるにあたって、「カテゴリー化する人間」というファクターを想定するということは、「超経験的な装置の機能的代替物」としてカテゴリー化というプロセスを想定するということなのだ。次の段階で考えたいのは、「あなたと私を *wir* としてみる」というカテゴリー化のためには、この言語共同体内に間主観的 (*intersubjektiv*) に、形式と意味のペア (Form-Meaning-Pairing) として「*wir*」という語彙項目 (カテゴリー) が共有されていなければならないという点だ。カテゴリー化には、比較の第三項 (*tertium comparationis*, *das Dritte des Vergleiches*) としての言語カテゴリーが必要なのだ。続くいくつかのセクションでは、*wir* の場合のように、語彙項目に関して起こると平行したカテゴリー化のプロセスが、文法構造についても起こると主張が妥当かどうかを考える。

13) 指標詞の意味論と語用論に関する考察は酒井 (2013) を参考にした。

14) ライヘンバッハ (Reichenbach 1947: 284) は、任意の要素 a の言語的意味 (meaning) の定義に必ず a のトークンが登場するという性質をトークン反射性 (Token-reflexivity) と呼び、この性質を持つ語を指標詞と呼んでいる。

2.3. 意義と意味を区別する意味モデル

カテゴリーの意味 (Bedeutung) は間主観的に、しかし時空に依存しない形で心理的にのみ存在するものだ。これが直接そのカテゴリーの具体事例 (instance) を指示する (verweisen) わけではない。Buch という音声は、聞き手にタイプとしての本を想起させるに過ぎない。Buch というカテゴリーを用いて具体的な Buch を指示するためには、このカテゴリーを定¹⁵⁾にする文法が必要だ。事物に関していうならば、定にするとは「どれか」を指定してやることだ。その際に用いられる代表的な要素は、ドイツ語で言うならば定冠詞や不定冠詞などの決定詞だ。しかし、発話の場にその本がないのなら、DAS (Buch) と指定しただけでは、本というカテゴリーの中の、現場にないどの具体事例が問題になっているかを聞き手は同定することができない。どの具体事例が問題になっているかを示すためには、その問題の本を構成要素として含む事態を提示するしかない。「本が机の上にある」というように。言語で表わされる事態はモノとモノの関係からなっている。モノとモノが時間とともに展開する関係を表すのが動詞である。モノについて「どれか」を指定し定にするのと同様に、事態を表すカテゴリーも、そのカテゴリーのどの具体事例が問題になっているかを示すためには定にされる必要がある。ドイツ語に関して言うならば、事態を定にするためには、少なくともアスペクトや時制、それに態や法が指定されている必要がある。その際に用いられる代表的な要素が、接辞 (語尾) や (法) 助動詞といった文法項目だ。これら文法項目は文という単位の中で初めて用いられる。この意味で意義 (Sinn) を表す言語記号の単位は、基本的には文だと考えてよさそうだ。

(7) 猫がネズミを追いかけていたらしい。

という文を例にとると、ここで行われているのは、ある動物の個体の「猫」と「ネズミ」というカテゴリーへの分類 (語彙項目のカテゴリー化)、ある動きの「追いかける」というカテゴリーへの分類 (語彙項目のカテゴリー化)、それから、当該事態の「完了」というカテゴリーへの分類 (タ、文法項目のカテゴリー化)、

15) 名詞句が定 (finit) であるとは、名詞句の指示対象を話者が物理的あるいは文脈の中で同定 (identify) できるということである。

発話内容の「伝聞」というカテゴリーへの分類（ラシイ、文法項目のカテゴリー化）だ。しかし今回、事態を定にする文法（＝「追いかける」というカテゴリーに含まれる事態の中で、どの具体事例が問題になっているかを同定する要素）の中でとりわけ注目したいのは、そもそも「追いかける」という事態を、この言語で「主体と対象による行為」として捉えることを可能にする文法要素だ。「追いかける」という事態が「主体と対象による行為」として捉えられるなどということは、言語普遍的な事実であって、個別言語の言語知識ではないと思われるかもしれない。しかし、次のセクションでドイツ語と日本語を比較してみると明らかのように、言語普遍的に客観的に捉えられていると思われがちな空間的移動ですら、言語が異なれば、さまざまに異なる様式（Art）で提示されうる。¹⁶⁾ どのような事態も、その捉え方が一つしかないというようなことはない。それでもある動物の2匹の個体が動いている様を、「猫がネズミを追いかけている」とみなし（als ob etwas ansehen）表現する者がいて、それを聞いて同じ意味表示にたどり着く者がいるというのは、同じ意味表示にたどり着くための仕組みをその言語が用意しているということに他ならないと考えてもよいだろう。どの個別言語も、ある事態を捉えるために、事態の特定的一面を捉えた型を備えている。ある事態を特定の言語で言語化するとは、その都度その言語の捉え方を適用（カテゴリー化）するということだ。¹⁷⁾ ここで想定する「成功した言語コミュニケーション」とはすなわち次のようなものだ。カテゴリーとしての語彙項目と文法知識（＝言語知識）を備えている人間が、世界をカテゴリー化し、それを提示する。聞き手は自らも共有する「言語知識」を用いて、提示されたものと同一の意味表示にたどり着く。同一の意味表示にたどり着くとは、聞き手が自分の認識の空間において話者と同じ事態を構築するということだ。そして、同一の意味表示を構築するための捉え方の型を構成するのが構文、文法形態素、文法関係などを含む文法だ。次のセクションではドイツ語と日本語それぞれの言語が、「移動」という事態を成立させるために、具体的にどのような事態の捉え方の型（カテゴリー）を用意している

16) 所有を表す動詞としての sein と haben (Benveniste 1966/1974)、あるいは「する」と「なる」という類型論（池上 1981）についても参照されたい。

17) „Unsere Sprache ist notwendigerweise perspektivisch: Wenn jemand die Rückenansicht eines Gegenstands beschreibt, andere wiederum die Seitenansicht oder die Vorderansicht, so kann keiner von ihnen behaupten, seine Beschreibung des Gegenstands sei richtiger.“ (Leiss 2009: 182)

かを確認したい。その際、言語的に構築される時空間に注目する。

3. 事例研究

3.1. ドイツ語の移動を成立させる時空間

文法を通して言語的に構成される時空間、と聞いて多くの人の頭に最初に思い浮かぶのは、印欧語の時制を通して構成される時間ではないかと思う。時制という文法カテゴリーがコードするのは、コムリ (Comrie 1985) によると、時間軸上のどこに、動詞的出来事 (命題) が位置づけられるかということだ。この時制をモデル化したのがライヘンバッハ (Reichenbach 1947) の時制モデルだ。このモデルにおいて時間は発話時間、出来事時間、参照時間の関係で記述される。現在と過去という時制では、発話時と、出来事時間および融合した観察時間との関係が問題になる。現在完了形では参照時間、つまりどこからその動詞的出来事が観察されたかを考え合わせる必要が出てくる。参照時間の位置が完了形と過去形を分ける、というように。¹⁸⁾ 本稿の文脈では、英語やドイツ語をもとにモデル化されたライヘンバッハの時制モデルが、時間を「異なる時点の組み合わせ」として提示するものであるということは重要だ。なぜなら、時間を概念的に時点として扱うためには、時空間が客体化されている必要があるからだ。しかしここで問題にしたいのは、当該の動詞的出来事が時間軸上のどこに置かれるかというこの時制の問題ではなく、そもそもその動詞的出来事自体 (移動) を成立させる時間の経過 (=モノとモノが時間とともに展開する関係) をドイツ語と日本語がどのように捉えているかということである。

(1) Ich komme gleich.

(2) 今行くよ。

今、再掲したドイツ語文 (1) が表現している移動を時空図に表すと、この言

18) このモデルでは、時間は *Betrachter* が、今の自分の位置 *Jetzt* (発話時間) を基準にして、自分自身を時間軸の上のどこに位置づけるか (参照時間)、そして当該の出来事はその参照時間との関係でどこに位置づけられるか (出来事時間) として構想されるということだ。どこに参照時間がおかれるかというのがこの言語の時間関係を考える上での支柱だ。

語では移動は次のように想定されているということが出来る。

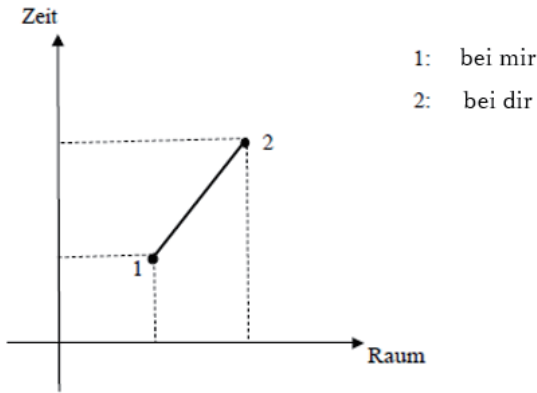


図1. ドイツ語の移動のコンセプト (時空図)

ここにあるのはいわゆるデカルト座標だ。この座標軸は出来事を、事態から独立した観察者 (Betrachter) の位置から客体化された時空間に描写することを可能にする。時点1は話者が対話の時点で存在する場所を離れる時点を表し、時点2はゴール、つまり対話相手の元に到着する時点だ。時点1と2の間をつなぐ線は話者の移動という運動と、時間の経過を表わす。少なくとも例文(1)に関しては次のように言うことができる。この言語で空間的移動は、移動の終了地点の提示と、発話時点とイベント時間の関係を通して、「人ないしは事物が存在する場所の変化」として言語化されると。また、この時の移動が「(達成的) 移動」であるためには、そうでない場合を考えれば明らかであるように、移動(人)物と終了地点が可算的 (zählbar, konturhaft) なものとして提示されている必要がある。可算的でない移動体やゴールは移動を達成的にしない。¹⁹⁾ さらに、ある事物が可算的なものとして捉えられるためには、そのものが、そのものの外から、つまり事態から独立した観察者の位置から眺められている必要がある。このような考察から、本稿の議論に関係する範囲では、ドイツ語の「移動」という事態の捉え方の型は次のように整理することができる。ドイツ語では移動を動作主 (Agens) がゴールに到達する【Wer/was bewegt sich zu wem/was?】という型で捉える。そし

19) 例えば Langsam gehe ich のような文は、本稿で扱う「達成的な移動」には含まれない。

て移動をこのような型で捉えるためには、図 1 に示したような客体化した時空間が想定されている必要がある。それでは日本語はどうか。

3.2. 日本語の移動を成立させる時空間

3.2.1. イク、クルの語彙的意味

まず語彙的意味の確認をしておこう。例文 (8)、(9) が「発話者が、発話時の自分自身のココに移動する」という事態を表すと仮定すると、その無標の読みにおいて、非文ないしは有標になるのは日本語ではイク、ドイツ語では *gehen* で、文法的なのはそれぞれクル、*kommen* だ。

(8) Ich komme/*gehe heute wieder hierher.

(9) 私は今日またここに 来る / *行く。

これに例文 (10)、(11) をそれぞれ例文 (12)、(13) と比較し考え合わせると、*kommen* とクル、*gehen* とイクの語彙的意味として「話者が今いる場所へ接近する移動を表すために典型的に使われるのがクルと *kommen*」、「話者が今いる場所から離れる移動を表すために典型的に使われるのがイクと *gehen*」と規定できる (a)。

(10) Ich ging gegen Mitternacht nach Hause.²⁰⁾

(11) (私は) 真夜中に家に帰って行った。

(12) Ich kam gegen Mitternacht nach Hause.

(13) (私は) 真夜中に家に帰って来た。

(a) *kommen* / 来る : 自分が今いる場所へ接近する移動

gehen / 行く : 自分が今いる場所から離れる移動

また、ドイツ語の *gehen*、*kommen* と日本語のイク、クルを用いた空間表現は、どちらも「その解釈 (つまり意図されている移動の方向を確定するために) に伝

20) Fillmore (1997: 80) の例文を参考にした。

達場面における話し手の位置が考慮される必要がある」という意味で直示的 (deiktisch) に用いられているということが出来る。直示表現の起点としての「伝達場面における話し手の位置」をビューラー (Bühler 1934) は **Origo** と呼んだ。**Origo** は伝達場面の今ここ私 (jetzt, hier, ich) という構成要素に分解できるという。今、この概念を使い (a) をより厳密に規定すると (b) のようになる：

(b) **kommen** / 来る：発話時の **Origo** へ接近し、移動の終点が話者の領域にある運動

gehen / 行く：発話時の **Origo** から遠ざかり、移動の終点が話者の領域にない運動

そうすると (1)、(2) では、「対話において話者が対話相手のところに移動する」という同じ事態を報告するのに、ドイツ語では **kommen**、日本語ではイクのように語彙的意味の異なる動詞が使用されるという状況があるということが言える。ドイツ語では確かに、「発話時の話者の **Origo** へ接近し、移動の終点が話者の領域にある運動」を **kommen** で表すことができるが = (12)、(1) のような対話場面においては、**kommen** の語彙的 (lexikalisch) な意味に反して、「発話時の **Origo** から遠ざかり、移動の終点が話者の領域にない運動」についても **kommen** を使うことができるということになる。一方、日本語では (1) と同じ対話の場面において **kommen** と語彙的に対応するクルを使用することはできない。日本語とドイツ語の移動表現におけるこのような語彙項目の選択の差は、「**Origo** の移動 (**Origo-Hineinsetzung**)」という概念で説明されることがある。すなわち、(1) のように「私があなたのところへ移動する」ことをドイツ語で **kommen** で指示できるのは、ドイツ語ではこのような場合に、話者が対話の場の自分の **Origo** を離れて、まるで相手の **Origo** に自分の **Origo** があるかのように (als ob etwas ansehen) 時空間を捉え直したうえで、移動を言語化しているからだという理解だ。一方、日本語については、「このような場合 **Origo** の移動ができない」と説明される。少し考えればわかるように、例えば (2) の日本語におけるイクの使用に関して、「日本語はこのような場合に **Origo** の移動ができないから」と説明することは、結局のところ、日本語に関しても (ドイツ語に関しても)、この直示詞の使用ルール

について、つまり、何に動機付けられてある場合は話者が自身の Origo を移動できるのか、あるいはできないのかについて、何も説明していないに等しい。そもそも、(2) におけるイクの使用を、「日本語はこのような場合 Origo を移動しない」と説明することの裏にあるのは、言語的に表現される「移動」が日本語においても「動作主 (Agens) がゴールに到達する」という型であらわされるという前提だ。しかしこの前提には、よりよく知られた言語がそうしているという以外に言語普遍的な根拠がない。ここで私たちが (1)、(2) に関して、「客体化された世界 A (= 客体化された時空間に構成される移動 (= ドイツ語の移動)) があって、それは B という捉え方 (= Origo 移動をしない日本語的移動) でも表現することができる」と説明するのであれば、それはデカルト的な意味論だ。それでは私たちは、この2つの移動がどのような関係にあるとみることができるだろうか。時間には実存がないということが言われていても、私たちは、色や温度や上下といった概念とは異なり、時間や空間については、なんとなく認知する人間と関係なく客観的にそこにあるように考えてしまうのではないかと思う。言語学はこの問題をどのように扱ってきただろうか。「言語的に構造化される時空」について、言語学には長い議論の歴史がある。そこでは言語における普遍性と相対性が問題になっていた。言語的相対論 (Theory of linguistic relativity) で問題になるのは言語が思考を形成するののかという問題だ。最も有名なのはサピアウォーフの仮説 (Sapir-Whorf hypothesis) だ。これは、それぞれの言語がそれぞれ異なる構造を持っていて、この構造が個別言語の世界観となって、私たちの思考を形作るというものだ。サピアの業績のうち、特筆すべきもののひとつは、彼が時間と空間は、個別言語のパースペクティブを通して私たちに認識される構造物だという見解を打ち出したことだ。人は言語で思考を表現するだけではなく、また、時間や空間は理性などによって獲得されるものではなく、言語が構造化するものだと考えたのだ。言語がその使用者の思考を決定付けるという言い過ぎだが、サピアが全ての個別言語が各々に複雑性を持つと確信していた点はことさらに評価に値するように思う。彼の考察の一部を受け入れるならば、少なくとも言語的な時間や空間について私たちが問題にするとき、私たちは時間や空間の本質、あるいは客観的な時間や空間、といったものを前提すべきではないということになる。本稿の議論にとって重要なのは、言語の中の時間と空間に関して言うならば、ある言語の時間や空

間の構造を他の言語における時間や空間の構造を考える際に前提する理由はないということだ。ある言語に常識的な「時間」の概念が、別の言語に欠けているように見えても、その言語には違う形で、時間や空間を捉える型があるかもしれない。次のセクションでは日本語において移動を成立させる時空間の捉え方の型を確認する。

3.2.2. 日本語の移動の特徴

本稿の議論にとっては必要ではあったのだが長い回り道をした。ここまでで考えたことを踏まえ、例文 (2) をもとに、日本語の移動を成立させる時空間の型を考えてみよう。

(1) Ich komme gleich.

(2) 今行くよ。

例文 (2) の形式的特徴としてまず挙げられるのは、移動の参加者がこの発話場面の対話者であれば、それは言語化される必要がないということだ。一方、言語化される必要があるのは、その移動が話者から見て (sprecherorientiert)、離れる移動 (sich entfernend) なのか近づく移動 (sich nähernd) なのかということだ。それでは、移動の参加者が言語化されないにもかかわらず、その移動が「話者から見て離れる移動なのか近づく移動なのか」ということが (2) でどのように伝わるのか。それは人称制限のもとで直示要素(イク・クル)を使用することによってだ。人称制限についてはドイツ語の 1、2 人称代名詞の使用を考えるのがわかりやすい。つまり話者と聞き手が同じ語を一つの場面で一つの指示対象に関して用いることができないという制限だ。²¹⁾ この人称制限 (= Origo が移動できない) を言語知識として共有する対話者によって、イクやクルといった特定の方向を語彙的意味としてもつ要素が使用されると、そこには「話者から見て」という意味が付与

21) 対話の場面で私は、あなたが Ich で指示するのと同じ人物 (=あなた) を、同じ語 (= Ich) で指示できない (=私は、あなたを「Ich」で指示できない)。日本語が Origo の移動ができない、というのはこの制限のことだ。つまり「(あなたから見て) Ich」、あるいは「(あなたから見て) kommen」というような表現を日本語は特別な事情がない限りしないのである。

される。すなわち、(2) のように「その移動が話者から見て離れるのか近づくか (Von mir aus gesehen sich entfernend oder sich nähernd?)」を伝達できる。このように考えると、ドイツ語で「動作主 (Agens) がゴールに到達する (Wer/was bewegt sich zu wem/was?)」という型で捉えられるのと同じ移動が、日本語では「その移動が話者から見て離れるのか近づくか (Von mir aus gesehen sich entfernend oder sich nähernd?)」という型で捉えられているということが出来る。前者には、動作主とゴールが可算性のあるものとして提示されている必要²²⁾が、後者には、人称制限がある。さらに前者のように可算的な事物の移動として移動を捉えるためには、時空間が客体化されている必要があった。それでは日本語の移動の場合はどうか。

フンボルト (W. v. Humboldt 1828/1968) の次のような観察は、日本語の移動を成立させる時空間のコンセプトについて考えるヒントを与えてくれる。フンボルトは直示的な (つまり人称と関連した) 場所の代名詞を移動表現に使用する言語に言及している。そういった言語の一つに日本語があり、そのような言語における移動と同じコンセプトが、ドイツ語が *komm du her* を *her* と省略するときにもあるとしている。„Im Ganzen findet sich das Nämliche auch in anderen Sprachen, namentlich im Deutschen. Denn es ist gerade ebenso, wenn bei uns: *komm du her!* zum blossen: *her!* abgekürzt wird.“ (Humboldt 1828/1968: 312) それでは、ドイツ語の命令形において、動詞と 1、2 人称代名詞が省略され副詞だけが残った *her* のような表現の背後にあるコンセプトとはどのようなものか。フンボルトはそのような言語においては空間 (Raum) という概念がドイツ語の 1、2 人称代名詞に機能的に一つたり対話者を指すという機能において一比較すると考えた。

[S]o müssen sie (Pronomina²³⁾) einen sinnlichen Ausdruck enthalten, welcher auf alle möglichen Individuen, da jedes zum Ich und Du werden kann, passt, und doch den Unterschied zwischen diesen beiden Begriffen bestimmt und als wahren Verhältniss-Gegensatz angiebt. Es muss alsdann zur Bezeichnung ein sinnlicher, und doch von aller

22) そうでなければ達成的な移動にならないことに注意されたい。

23) 筆者による。

qualitativen Verschiedenheit abstrahirender Begriff gebraucht werden, welcher das Ich und das Du in Eine Sphäre umschliesst, innerhalb dieser Sphäre aber eine sich gegenseitig bestimmende Theilung möglich lässt. Ein solcher Begriff ist der Raum.
(Humboldt 1828/1968: 148)

Alle diese Bedingungen erfüllt nun der Begriff des Raumes, und ich kann Thatsachen nachweisen, welche deutlich zeigen, dass man in einigen Sprachen diesen auf den Pronominalbegriff bezogen hat. <…> Die Sprachen, welche diese Thatsachen liefern, sind, <…> die Japanische und Armenische. (Humboldt 1828/1968: 54)

次のハイデッガー (Martin Heidegger) の説明が分かりやすい。„W. v. Humboldt hat auf Sprachen hingewiesen, die das <Ich> durch <hier>, das <Du> durch <da>, das <Er> durch <dort> ausdrücken, die demnach – grammatisch formuliert – die Personalpronomina durch Ortsadverbien wiedergeben“ (Heidegger 1927: 119)。1、2 人称代名詞と機能的に比類する空間概念は、それぞれ hier と da である。ドイツ語における ich が日本語のような言語では hier として、du が da として、つまり人称代名詞が場所の副詞として現れ、これが「話者と聞き手」を表すという機能を果たすと指摘しているのだ。話者と聞き手が ich と du ではなく、hier と da と捉えられるような (時) 空間で (2) の移動は成立しているという仮定が可能だろうか。またドイツ語が komm du her を her と省略するときにあるコンセプトも同じだと考えてよいだろうか。

移動表現において、話者が hier として捉えられるというのは、発話場面の話者がその移動表現の直示起点として捉えられるということだ。直示表現の起点は、無標の場合、発話の場における話し手の Origo である。つまり、文法を通して仮構の時空間を構築する際、取り立てて Origo の位置に関する指示がないのであれば、それは、仮構の時空間は対話の場における話し手の Origo の上に構築されるということだ。「特段の指示がない」というのもまた、記号においては「前提からの逸脱がない」ことのコードに変わりない。話者が hier として捉えられるときにある時空間のコンセプトというのは、つまり、客体化した空間の中に表現対象

としての自らをみることなく、対話の場における自分の **Origo** を **hier** (=直示起点) として構築する時空間のことだ。(I) 逸脱がないことの無標のコードと (II) 言語記号の単位を文とみること、それから (III) 話者が **hier** として捉えられているときの時空間のコンセプトは、対話の場における話し手の **Origo** を **hier** として構築する時空間のコンセプトである、ということが認められるならば、人称制限のもとで直示要素 (ここではイクや **komm du her** の省略としての **her**²⁴⁾) を用いると、そこには確かに、一部目に見えない形で (= **von mir aus gesehen** の部分が非明示的 (**implizit**))、しかし必然的に「(2) =発話の場の (話者にとっての) **hier** から出発し、発話の場の (話者にとっての) **da** への移動 (=Von mir aus gesehen **sich entfernend oder sich nähernd?**)」がコードされると考えることができる (図 2)。

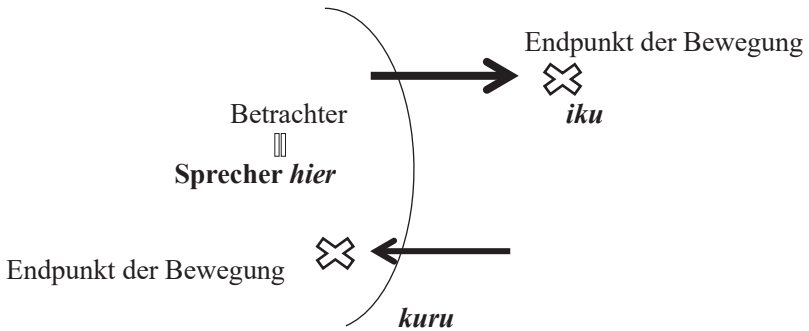


図 2. 日本語の移動のコンセプト (イクとクルを例に)

ここまでをまとめたいと思う。日本語の移動を成立させる時空間はどのようなものか。現段階での答えは、対話の場における話し手の **Origo** を **hier** として構築した時空間である。人称制限 (= **Origo** が移動できない) のもと特定の方向を語彙的意味としてもつ要素が使用されると、「話者から見て」という意味が付与されるのはなぜか。文で一つの言語記号と考える場合、人称制限のもとでイク・クルのような移動の出発時点や到達時点言語的に指定する直示要素を使用し、かつその他の限定が行われないとすると、当該の移動の出発 (時) 点 (=イク) ないしは到達 (時) 点 (=クル) に話者が存在する位置が文 (法) の中にコードされ

24) このように主張するためには、ドイツ語の **her** で日本語と同様の **Origo** の移動が起こらないかを確認する必要があるが今後の課題としたい。

る (implizit mitkodieren) からである (図3)²⁵⁾。

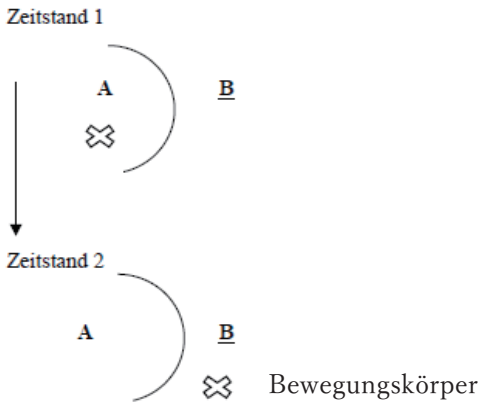


図3. Bから見たクル (移動物が存在する場所と時間の経過)

3.3. 言語の中の二つの時空間

(1) (2) の移動を成立させる二つの時空間を整理する。ここまで、「話者が対話相手のところに移動する」ことをドイツ語では「動作主 (Agens) がゴールに到達する (Wer/was bewegt sich zu wem/was?)」という型で、日本語では「その移動が話者から見て離れるのか近づくか (Von mir aus gesehen sich entfernend oder sich nähernd?)」という型で捉えられるが、このような移動の捉え方を可能にしている時空間はどのようなものかということを考えてきた。その際に注目したのは、文法を付与する際に直示起点 (Origo) としての役割を果たす話者 (認知主体) の捉えられ方、及び言語化のされ方だった。(1)、(2) のような形で移動が表せる背景には、ひとつに、ich という一人称代名詞による話者の言語化と、非明示的 (implizit) な話者の言語化があることを確認した。そして少なくとも (1)、(2) の例に関しては、ich のときは Origo の客体化 (Objectification) に伴い客体化された時空間が、非明示的であるときは Origo が対話の場にとどまることを受けて客体化されていない時空間が言語的に仮構されると整理できる可能性があることを見

25) 例えば、「10 時に行きます」と言えば、「イク」の使用にもかかわらず、到達時 (点) が指定されることになる。このような問題を考えるためには、より詳細な語彙的意味の分析が必要になる。今後の課題にしたい。

た。このことの根拠となったのは、日本語に関していうならば、イク・クルの語彙選択が通常、話者の Origo を起点にしたものしか許されないこと（人称制限）、また、対話者が言語化されないということ、ドイツ語に関していうならば、ドイツ語 *kommen* が、その語彙的意味に反して、話者へ向かう移動も話者から離れる移動も表すことができること、加えて、ドイツ語では移動表現に、可算的な移動体とゴールの明示が必須であること、という当然と言えば当然の言語事実の観察だった（図4）。

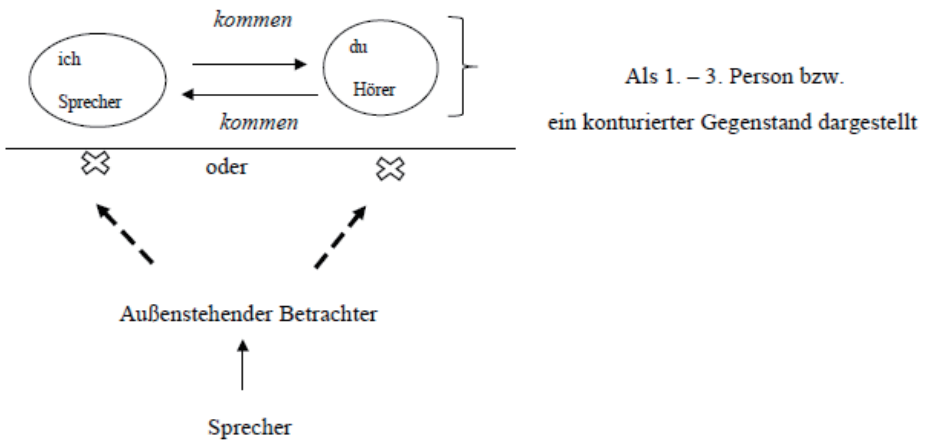


図4. ドイツ語の移動が成立する空間

ここで図2と図4の間に見られる想定される時空間の相違の要因を「Origoの移動の可否」としてしまっただけでは、本稿での議論が振り出しに戻ってしまう。本稿では、この両モデルの差異は、対話の場の話者が実際の言語使用の中で自分自身を *ich* と捉えたり、*hier* と捉えたりできることと相関して、*ich* のときは Origo の客体化が起こり、*hier* のときは客体化が起こらないというように、Origo に関して [±客体化] の関係にあるという形で関連しあうことに起因すると考える。「Origoの移動の可否」は、この客体化の有無と相関する形である。²⁶⁾

26) 以上はあくまでも、例文(2)で表されている移動の把握の仕方の可能性について考察したものである。例えば日本語でも、「私が君の所へ来るよ」というような文の場合に、「私」を使用することで Origo の客体化が起こり、この文も適格となる、ということではない。この点についての検討も今後の課題としたい。

3.3.1. 二つの時空間の関係

まとめに代えて言及しておきたいのは、ドイツ語と日本語それぞれの型が提示されたとき、私たちにとって重要なのは、差異それ自体ではなく、その動機づけられた異なり方の解明と、そこには両者に共通する不変部分 (Invarianz) があるという想定である。そうでなければそもそも対照研究が不可能になってしまう。Invarianz は私たちが言語的相対論に探しても見つけることができない視点だ。問題は何を Invarianz と見るかということだ。本稿のはじめに確認したのは、「客観的な世界 A (= 客体化された時空間に構成される移動 (= ドイツ語の移動)) があって、それを B という捉え方 (= Origo 移動をしない日本語的移動) でも表現できる」というのでは、言語記号の意義 (Sinn) にたどり着くことが理論上可能な認知意味論の枠組みで意味研究を行ううまみが少ないのではないかということだった。つまり、客体化された世界を Invarianz とみたいわけではない。このように考えてくると、先に見た「人間の空間認知における非対称性」についても考え直す必要が出てくる。というのも、先に確認した段階では、現実構成主義的な言語観では、言語記号によって表される意味は、客観的な世界そのものではなく、カテゴリー化する人間というフィルターを通した主観的な世界だと考えたからだ (= 言語表現が表す意味 = 主観的な世界)。しかし、その後の本稿での議論を踏まえると、認知者から独立した世界において成立する事態 (= 「A が B の上にある」) を客観的事実と見なし、それに主観的世界 (= z. B. 「辞書は机の上にある」「机は辞書の下にある」) を対立させることは、私たちがとるべき態度ではないということになる。というのも、超経験的な装置を通して客観的世界が認識できると考えない私たちは、ここでいう客観的な事態 (= 「A が B の上にある」) もまた、主観的な事態 (= 「辞書は机の上にある」「机は辞書の下にある」) 同様、人間の捉え方 (認知活動) から独立して成立するものではないと見るべきだからだ。私たちは客観的な事態もまた、客観的な事態として (= als ob etwas ansehen) 言語化されたひとつの事態とみなす必要がある。それでは、客観的な事態あるいは主観的な事態として表現される不変部分 (Invarianz) とは一体何なのか。この点についてハイデッガーの慧眼が発揮されるのは次の箇所だ：

Es ist kontrovers, welches wohl die ursprüngliche Bedeutung der Ortsausdrücke sei, die adverbiale oder die pronominale. Der Streit verliert den Boden, wenn beachtet wird, dass die Ortsadverbien Bezug haben auf das Ich qua Dasein. Das <hier>, <dort> und <da> sind primär keine reinen Ortsbestimmungen des innerweltlichen an Raumstellen vorhandenen Seienden, sondern Charaktere der ursprünglichen Räumlichkeit des Daseins. Die vermutlichen Ortsadverbien sind Daseinsbestimmungen, sie haben primär existenziale und nicht kategoriale Bedeutung. Sie sind auch keine Pronomina, ihre Bedeutung liegt vor der Differenz von Ortsadverbien und Personalpronomina. (Heidegger 1927: 119)

Ich と hier、どちらかが先にあるわけではない。あるのは、対話の場の二人がひらく空間 (Invarianz) だけだと言っているのだ。世界の側には直示詞 (hier、ココ) の指示対象のみならず、対話以前には、客観的に存在すると思いがちな ich の指示対象であるところの話者でさえ存在しない。話者というと、どうしても、ある種のモノ (ヒト) として客観的に存在するように思いがちだが、そうではなくて、対話の中で (前提されたり、省略されたりすることも含め) 指示されるという事態の後に、事後的に、例えば ich として、あるいは hier として出現するものなのだ、とそう言っているのである。²⁷⁾

本稿では、語彙項目だけではなく、文法もまた、言語共同体内で間主観的に共有すべき項目 (=形式と意味のペアとして) として記憶されており、文を作る際には、語彙項目に起こると平行したカテゴリー化のプロセスが、文法においても起こる、という仕組みで言語記号が意義 (Sinn) を獲得するという仮説が妥当かどうかということを考えてきた。言語の機能についての考察や推定可能な時空間についての検討を経て、現段階での結論は (I)、(2) を例にとるならば、従来、統語論の自律性や Origo の移動の可否などで説明されていた差異の少なくともその一部は、話す主体の主観性の度合いの差のある種の反映としての、[Origo の客体化の有無] という意味的動機づけが可能なのではないかというものである。これ

27) Wittgenstein の次の引用も、このような事情を説明しようとしたものだろう。„Der Raum des Denkens und der Wirklichkeit ist die Sprache. Wir denken im sprachlichen Raum. Auch die Wirklichkeit gibt es nur im sprachlichen Raum. <…> Die Sprache zeigt ohne Logik, allein, autonom das Wirkliche.“ (Wittgenstein 1921/2003))

が文法構造のどの部分に担われるのかという形式面についての検討は今後の課題にしたい。

参考文献

- Benveniste, Émile (1966/1974) : Probleme der allgemeinen Sprachwissenschaft. Aus dem Französischen von Wilhelm Bolle. Frankfurt am Main. Syndikat.
- Bühler, Karl (1934/1982) : Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache. Stuttgart. Gustav Fischer. (UTB; 1159) .
- Chomsky, Noam (1957) : Syntactic structures. 11th printing. Mouton.
- Chomsky, Noam (1965) : Aspects of the theory of syntax, Cambridge, Mass., MIT Press.
- Comrie, Bernard (1985) : Tense. Cambridge u.a., Cambridge Univ. Pr.
- Fillmore, Charles J. (1997) : Lectures on deixis. Stanford:CALI Publications.
- Frege, Gottlob (1892/1994) : *Über Sinn und Bedeutung*. In.: Funktion, Begriff, Bedeutung: fünf logische Studien, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht.
- 廣瀬幸生 (2007) : 「言語が語る意味の世界」言語学出版社フォーラム。リレーエッセイ。
- Heidegger, Martin (1927/2006) : Sein und Zeit. Tübingen, Niemeyer.
- Humboldt, Wilhelm von (1828/1968) : Gesammelte Schriften, Bd. 6. Hrsg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften. Walter de Gruyter.
- 飯田隆 (2002) : 言語哲学大全 4。勁草書房。
- 池上嘉彦 (1981) : 「する」と「なる」の言語学 : 言語と文化のタイポロジーへの試論。大修館書店。
- David, Kaplan (1989) : Demonstratives. In J. Almog, J. Perry, & H. Wettstein (Eds.) , Themes from Kaplan (pp. 481-565) . Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, George / Mark Johnson (1980) : Metaphors We Live By. Chicago. University of Chicago Press.
- Lakoff, George (1987) : Women, fire and dangerous things. Chicago. University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1985) : Observations and Speculations on Subjectivity. In: John Haiman (Hrsg.) : *Iconicity in Syntax*. Amsterdam: John Benjamins, S.109-150.

- Langacker, Ronald W. (1990) : *Subjectification*. In: *Cognitive Linguistics* I. 5-38.
- Leiss, Elisabeth (2009) : *Sprachphilosophie*. Berlin / New York. de Gruyter.
- Nunberg, Geoffrey (1993) : Indexicality and Deixis. *Linguistics and Philosophy*, 16: 1.
- 大堀壽夫 (2002) : 『認知言語学』 東京大学出版会。
- Reichenbach, Hans (1947) : *Elements of Symbolic Logic*. New York: Macmillan & Co.
- 酒井智宏 (2013) : 「認知言語学と哲学—言語は誰の何に対する認識の反映か—」 :
『言語研究』 144:55-81.
- 宗宮喜代子 (1996) : 「語学研究所論集」 第 1 号, pp. 25-49.
- 山梨正明 (2000) : 『認知言語学原理』 くろしお出版。

(しらい・ともみ 学習院大学文学部ドイツ語圏文化学科 助教)

